

大学・高専における日本語表現系講義の実践報告

高橋 秀太郎* 岸 本 洋 輔** 河 内 聡 子*** 茂 木 謙之介****

Practice report : “Representation in Japanese” course
in universities and a technical college
Shutaro Takahashi, Yosuke Kishimoto, Satoko Kawachi, Kennosuke Motegi

概 要

本論文は、大学、高専における日本語表現系講義の実践報告である。実践が行われた学校は、東北工業大学、宮城学院女子大学、小山工業高等専門学校である。講義者各自が、学生の声も取り入れつつ、工夫を重ね、現時点でたどり着いた講義内容・成績評価方法についての詳細な報告となっている。

なお、報告に際しては、以下の点について必ず記述した。

- 1 講義の目的と概要
- 2 講義の内容と成績評価の方法
- 3 学生の反応
- 4 今後の課題

大学や高専側から提示される講義目的をふまえつつも、実際に学生を前にして講義を行う際には、さらに細かい講義目的を設定することが必要となる。それを各教員がいかに設定し、その目的に沿ってどのような講義を実践しているかをまず記述した。さらに、講義内で出す課題と成績評価の方法についても報告されている。実践系講義において、課題の出し方や成績評価の仕方は、学生に力を付けさせるために大きな意味をもつためである。

はじめに（高橋）

本論文は、東北工業大学、宮城学院女子大学、小山工業高等専門学校で行われている日本語表現系講義の実践報告である。具体的な報告講義は、第1章が東北工業大学全学科1年生対象の「日本語表現」、第2章が東北工業大学ライフデザイン学部2年生対象「日本語表現Ⅱ」、第3章が宮城学院女子大学全学科1年生対象「日本語演習」、第4章が小山工業高等専門学校4年生対象の「文学」である。なお報告者4人はいずれも、日本文学に軸をおいた研究をしており、日本語表現指導についての研究・実践だけをしてきたわけではない。

さて、本報告のもくろみは、以下の通りである。

【大学、高専で設定されている講義目的をふまえながら、どのように講義内容を組み立て、授業を行っているかを詳細に報告すること】

大学1・2年生、高専4年生を対象とした4つの講義中、「日本語表現」をのぞく3つは非常勤として行っており、講義目的やシラバスを勤務校から指定されている。常勤として講義している

「日本語表現」は、当然のことながら担当者自身がシラバスをつくっている。しかし、2008年からの実践を通して、講義目的に大きな変更はないものの、講義内容の重点は変えている。

知っている限りではあるが、他の大学での日本語表現講義も、表現指導の専門家が担当しているのでなく、専門分野を異にする人が集まって行われているケースがほとんどである。そうした場合、共通の講義目的・シラバスはつくるが、実際の細かい指導は講義者の裁量に任せられることが多い。今回報告する4者は、それぞれやり方は違うものの、比喩的に言えば、あらかじめ設定された／した「講義目的・シラバス」にいかに血を通わせるかに注意を払って講義を展開している点で共通している。「日本語表現力をつける」という

2015年10月21日受理

* 共通教育センター准教授

** 東北工業大学非常勤講師

*** 宮城学院女子大学非常勤講師

**** 国立小山工業高等専門学校非常勤講師

講義目的を、学生の主体的な受講態度を引き出しながら達成していくための 4 者 4 様の具体的な取り組みを報告したい。

なお、本稿では、課題・発表の評価の仕方、基準もあわせて記述する。これは、各講義内容に、以下の、共通した特徴があるからである。

【学生が書く／話す／表現する／調べることを講義内容の中心とする】

実践中心の講義では、「知識修得の有無を問うテストをし〇×式の採点をする」だけにとどまらない評価の仕方が必要となる。講義者は、学生が表現力を身につけることに加え、講義をスムーズに進めることも念頭に置きながら、どのような課題をどの程度を出し、課題やテスト、プレゼンテーションをどのような基準で採点するのかを検討する必要がある。そして、成績・結果をフィードバックする際には、学んだことをその後に生かしていけるようにするための効果的な返却方法も考えなければならないのである。

それでは、以下具体的な報告に入る。

1 東北工業大学「日本語表現Ⅰ」(全学科 1 年生対象)の実践報告 (高橋)

1.1 講義の目的と概要

東北工業大学(以下工大とする)で日本語表現系講義を担当したのは 2008 年度からである。それ以前にも、工大では日本語表現系の講義が行われていたようだが、引き継ぎ等はなく、講義内容をゼロからつくるという状況であった。内容をつくる際に参考としたのは、2006、2007 年度に宮城学院女子大学(以下宮学とする)で非常勤講師として行っていた「日本語表現」という講義(現在は「日本語演習」と改称。本稿 3 章参照)である。この講義については『宮城学院女子大学 研究論文集』105 号(2007・12)掲載の「研究報告 日本語文章表現指導の実践報告と課題の検討」で詳述した。宮学より指定された講義目的は、「論理的な文章を適切に書く能力の習得を目標とし、添削等による実践的訓練を行う」であり、内容の具体は、講義者の裁量に委ねられていた。

宮学での経験を踏まえ、2008 年度、工大での講義目的・概要を以下のように設定した。

本講義は、大学在学中のみならず、広く社会と関わっていく際に必要となる表現能力の基礎を身に付けることを目的としている。そのために、講義ではテキスト等の問題を解きながら以下の力を養う

- (1) 正しく分かりやすい日本語を書き、話す力
- (2) 文章を構成し、レポートを書き上げる力
- (3) 状況に応じた言葉・文章を使用する力

この目的・概要は現在(2015 年度時点)もほぼ同じである。宮学では、「研究報告」で述べたとおり、添削力、レポート作成力を身に付けるための実践練習を講義の中心に据えていた。工大の講義目的の(1)は添削力の、(2)はレポート作成力の育成であり、大きく見れば宮学の講義内容と変えていないわけだが、細かく見れば変更した点がある。これについては次節で述べる。

1.2 講義内容と評価方法(講義についての学生の意見・感想は、全てアンケートの記述による)

前節で述べたとおり、工大で講義を開始する際に、細かい点で内容を変更したことがある。変更点の一つは、教員が添削する文章の字数を減らしたことである。宮学の講義は一クラス 20 人前後で構成され、それを 2～3 コマ担当すると総受講者人数は 40～60 人である。工大では、教員 1 人で 1 年生全学科を担当するため、コマ数は 8 コマ、総受講者人数は 600～700 人であった。1 コマの受講者数は少ないところで 60 名、多いところは 130 名前後になる。この受講者数では、宮学で行っていた、講義中における全員の文章チェックや内容指導をすることが大変難しい。講義中に受講者全員に目が行き届くため、宮学では、それなりの長さのレポート(1600～2000 字)を書かせても学生が講義についてこられた。さらに講義内外で細かく添削・評価できたのだが、工大の受講者人数でそれを行うことは不可能に近い。よって、書かせる文章は長くても 800 字程度とした。

変更点の二つ目は、就職活動を意識した指導を強化したことである。変えた理由は、学生からの要望である。講義を開始した 2008 年度にアンケートを行ったところ、就職活動を意識した文章表現指導をもっとしてほしいという声が多くあった。講義開始 2 年目(2009 年度)より、就職活動用エントリーシートの作成練習の一貫として「自己 PR 文」作成という課題を設定した。ま

た2012年度からは「自己PRセミナー」を日本語表現の講義内で行っている。これは、学科より推薦された4年生3名に講義にきてもらい、学生生活のことや、就職活動のこと、将来の進路のことを話してもらうというものである。セミナーを企画したきっかけは、工大全体で取り組んでいた「人間力育成・強化」であった。将来を見据えながら主体的に行動する力を養うため、あるいはそのきっかけをつかむため、まずは同じ学科の先輩の話をセミナーで聞き、その後各自で将来の目標を設定する。続いてこれまでの大学生活中、自身が何について最も努力したかを書く「自己PR文」に取り組ませる。1年生なので、大学生活といっても数ヶ月しかたっていないわけだが、就職活動で行うことをほぼ反復することで、自身が今後何をするのか、何をしなければならないのかを具体的にイメージできるようだ。特に「自己PRセミナー」実施以降、講義アンケートにおいて、就職活動のことを知ることが出来て良かったという声が多く聞かれるようになった。日本語表現系講義の本来のあり方からすればあるいは邪道なのかもしれない、問題点もある（課題のところで記述する）が、「就職活動に対応できる文章力」を一つの目標として講義を展開することには、「どのような内容・質の文章を書くことを目標とすべきか」を学生に明確に示すことができるという点で大きなメリットがある。工大に限らないだろうが、特に理系学生には、そもそも国語が苦手で、さらに文章を書くことも嫌いだという人が少なくない。全員の文章をその場でチェックしながら講義を進めることも難しい。そうした状況で文章表現を指導する際には、具体的な目標を掲げることが、講義運営上、大事になってくる。教科書に載っている小説のような名文（イメージとしての）を目指すのではなく、就職活動で書かなければいけない、誰にでも分かる、正しい文章を書くための講義であると伝えておくことは、苦手意識を持っている学生に余計なプレッシャーを与えず、また講義に参加する動機付けにもなっているようである。

さて、自己PRセミナーを取り入れた、2012年度以降の講義内容は下記の通りである。（丸数字は講義回を示す。例えば①は第1回講義を指す）

I ①～⑤ 文章添削練習

II ⑥～⑨ 「分析／説明・考察」練習

III ⑩～⑫ 自己PRセミナー＋自己PR文作成

IV ⑬～⑮ 敬語練習

I～IVそれぞれに課題、もしくはテストを設定し、その配点は全て25点満点である。I～IIIまでの課題では、必ず学生が自分の文章を添削し提出することになる。それを、教員が再添削し、指摘された間違い部分等の数によって点数が決まる。例えばIでは、「自己紹介文」を自分で添削する課題を出す。教員による添削数が、0・1個ならば満点（25点）、2・3個ならば20点というように点数が決まる。IIで行うテストでは、文章の間違いだけでなく、論理性も評価の対象となる。「自分の文章を自分で直す」課題やテストを反復することで、添削意識を高めていく狙いがある。

1.3 学生の反応について

講義に就職活動用の文章表現を取り入れてから、講義に対する不満の声はほとんど無くなった。「なんのためにこの講義を受けるのか」が明瞭になったことによるものと思われる。講義のガイダンスでは、今後自分で自分の文章を直すためにしっかり添削力を付けておかなければならないと話している。学生は、自分の文章を直してくれる人がこの先いなくなるということに改めて気付くようで、そのことも講義を受ける動機付けになっていると考えられる。

1.4 今後の課題について

工大で日本語表現講義を始めて8年目だが、非常に残念なことに、学内において、日本語表現の力がついているという声は皆無である。聞こえてくるのは、日本語力が無い、文章が読めない、書けないという教員の嘆きの声ばかりである。日本語表現の講義を受けても大学で学ぶための日本語力がまるで身につけていない、この講義はやっても無駄なのではないかという厳しい指摘もあり、力不足を痛感している。就職活動を意識させることにはある程度成功しているのかもしれないが、講義を受けた学生が、普段から、読む相手を意識した文章表現を実践しているとはとうてい言えないというのが現状であろう。また講義でやっている内容と、各教員が学生に必要だと考えている日本語力にずれがあるようにも感じている。

工大生の日本語表現力・読解力低迷という事態を受け、2013年度より、ライフデザイン学部だ

けではあるが、「日本語表現Ⅱ」という講義が開講されるようになった(詳細は2章参照のこと)。だが、さらなる日本語力養成のための講義が必要との意見が学内に多く、例えば、日本語表現を通年にし、全学科必修とするのはどうかという意見もある。そして、これを機会に、いわゆるアカデミック・スキル育成の講義へと、内容を広げていくべきだという意見もあわせて出ている。もし、この意見が採用された場合には、工大生にとって必要な／不足しているアカデミック・スキルとは何か、あるいは日本語力とは何かを見極めることが必要となる。これまでも、他教員からの具体的な意見をもとに、内容を少しずつ改変してきている(例えば「分析・考察」講義の拡充)。今後は、アンケートを利用して全学的な危機意識の詳細を把握し、それをもとにした講義計画、展開が必要となろう。もしそうなった場合は、別稿にて経過を報告したいと考えている。

2 東北工業大学「日本語表現Ⅱ」(ライフデザイン学部全学科2年生対象)の実践報告(岸本)

2.1 講義の目的と概要

東北工業大学ライフデザイン学部で「日本語表現Ⅱ」の講義を担当している。2年次学生を対象とした前期15回の授業で、今年度(2015年度)で3年目を迎える。教科書に語彙・読解力検定のテキストを採用するなど、就職活動を視野に入れた形で日本語の基礎的能力向上を図ることが目指された授業である。2015年度は学科別に計3コマ開講し、受講者数は合計82名だった。

シラバスでは授業目標および概要を以下のよう設定されている。

〈目標〉

新聞レベルの文章を正確に読み取り、まとめる力を身に付ける。

他人の意見を踏まえて、自身の考えを的確に表現する力を身に付ける。

〈概要〉

本授業では、社会に出ても必要とされる偏りのない広い知識を習得するために、様々な分野について書かれた新聞記事の読解練習を行う。同時に、得た知識を的確にまとめて表現する力を身に付けるための要旨作成の練習と、記事に対する自身の意見を簡潔にまとめる作

文練習も行う。また、これらを通じて添削能力も鍛えてもらう。最後に、大学2年生時点での文章表現力を確認し、同時に2年間の自身の足跡を正確に振り返るため、就職活動でかならず必要となる「自己紹介書」を作成する。

新聞記事の読解を通して一般教養を身に付けると同時に、文章読解力、要約力、作文能力を身に付ける。一般教養や時事的な知識を得るという観点から就職活動や卒業後の社会生活を意識させ、日本語能力の向上を図る点が1つの特徴である。以下、授業内容と狙いについて大まかに述べる。

2.2 講義内容と評価方法について

授業日程は、知識学習と要旨作成の練習を中心に行う期間(=前半11回)と、自己紹介書を作成する期間(=後半4回)とに大きく分かれる。

●前半の日程(知識学習および要旨作成・作文練習)について

『語彙・読解力検定公式テキスト 合格力養成BOOK 改訂2版 2級』(朝日新聞社・ベネッセコーポレーション、以下『公式テキスト』と略記)と、『新聞で力をつける「コラムと論説」演習ノート 第3集』(京都書房、以下『演習ノート』と略記)を教科書として用いてA3両面1枚の課題レポートを作成し、毎時間取り組ませた。加えて、授業中と同様の取り組みを行う自宅課題も課した。レポートは、1回につき『公式テキスト』1テーマと『演習ノート』所収の新聞記事1題を扱う。初回はガイダンス、11回目は試験のため、レポートに取り組むのは第2回から第10回までの9回分となる。提出されたレポートは添削・評価を施した上で次回授業時に返却する(学生の作成した要旨・作文をピックアップしてコメントを付したフィードバック資料も作成・配布する)。

前半の日程で学生に主に意識させていることは、以下の3点である。

- (1) 知識のインプット力を高めること
- (2) 答えを教えてもらうのではなく、自分で調べて探し当てる習慣を身に付けること
- (3) 要旨作成、作文作成を通して添削・推敲能力を高めること

この3つの点と関わらせながら、レポートの内容と狙いについて順に述べる。まず、学生は『公

式テキスト』を2ページ分あらかじめ読んだうえで授業に臨み、内容をインプットできたかどうかを試す○×問題に解答する（「予習チェック問題」）。採点・確認を終えたら、次に選択式の知識問題（「練習問題」、1回につき8題）に取り組み、解答冊子の解説内容をインプットできたかを試す○×問題にも解答する。この課題を通して、文章内容を知識としてインプットする習慣を身に付けてもらっている（上記（1））。

また、練習問題の解答に当たっては、上記（2）を意識した取り組みも行っている。学生は解答冊子を用いて採点する前に、「すぐにはわからなかった問題」の知識について電子辞書やインターネットなどで調べて、もう一度解答を選ぶ（最初の解答は鉛筆で、調査後の解答は青ペンで記入する）。知識を身に付けることのみを目的とするなら効率の悪い作業だが、この作業を通して「自ら能動的に答えを探したり確認したりすること」「複数の情報源から情報を集めて、妥当な判断に至りつくこと」の必要性や重要性を認識し、習慣づけるきっかけを得てもらっている。なお、レポートには「参照した辞書・HP および項目名」を記す欄とメモ欄を設け、参考資料を明示することや重要な内容についてメモを取る意識づけ、習慣づけも行っている。

以上の知識問題での取り組みを終えた後、新聞記事の要旨作成と記事に対する意見・感想を記す作文作成に移る。『公式テキスト』に収録された新聞記事（もしくはその要約）についての要旨を100～130字程度で作成してもらった後、スライドで130字程度のサンプルと100字程度のサンプルを提示しながら解説を施し、5分程で自己添削させる。添削が終わったら、そこで得た反省などを生かしてもう1題『演習ノート』所収の新聞記事の要旨を作成する。最後に、どちらかの新聞記事についての短い感想・意見を同じく100～130字程度で書いてもらう。2題目の要旨と作文は、教員側で添削・評価する。

要旨作成の解説では、文章の骨組みを簡潔な形で確認してもらうために、文の主語・述語を強調した形でスライドにサンプルを表示し、「文章の中心となる主語・述語のみの文をつくりながら全体を構想し、その上で修飾語句を肉付けしていく」作成過程を意識させる。また、100字程度のサンプルは前者で強調した主語・述語以外の修飾語句を削る形で作成するが、スライドで表示する際には取り消し線などを用いて添削・推敲の過程

が可視化できるような工夫を施している。こうした解説を通して、「最低限の内容を伝えるにはどの情報を残すべきか」「内容を詳しくするためにはどういった情報を増やせばよいか」といったことについて検討する材料を得てもらい、上記（3）の目標達成を狙っている。

最後の作文作成は、自己紹介書作成の前段階という位置づけで行う。とりわけ、誤字や表現面での誤りがなければ点検する姿勢を養うことに重きを置いた。この点を重視するのは、作文作成の際に学生の誤字や表現ミスが著しく増加することを初年度（2013年度）の授業で痛感したためである。

以上が前半の授業内容となる。なお自宅課題については、『公式テキスト』の予習チェック問題・練習問題・要旨作成で構成される。授業中と同一の取り組みを自宅でも行うことで、取り組みを日常的な習慣として身に付けてもらうことが狙いである。

●前半の日程の評価について

評価の内訳は、毎回提出のレポート合計9枚と自宅課題9枚を合計して25点、11回目に行うまとめ試験で50点となる。提出レポートは毎回3点満点で評価する。要求された手順に従ってレポートを完成させていれば2点、要旨の出来が良ければ1点与える。前者の2点分の評価については、知識問題の場合は解答、採点、調査、参照資料の出典メモや重要事項についてのメモの有無など、要旨問題の場合は添削・推敲の有無などが評価の基準となる。後者の1点分の評価については、教員側で作成した要旨サンプルと8割以上重なっていたら加点对象とした。また、自宅課題については提出レポートと同様に基準を満たしていれば1点、そうでない場合は程度に応じて0～0.5点とした。最終的な評価の平均点は20点（8割）ほどとなった。まとめの試験については、授業中に扱った知識問題と要旨作成問題に未見の新聞記事の要旨作成1題を加えて、85分間で解答してもらった。平均点は7割強となった。

●後半の日程（自己紹介書の作成）について

12回目の授業で自己紹介書作成についてのレクチャーを行い、13回目までに下書き完成、14回目に清書完成・提出、15回目に返却と講評を行う、という日程で取り組んだ。自己紹介書はA4一枚分の分量で、学生にはサンプルとして卒業生が実際に作成したものも配布する。自己紹介書の項目は「自身の興味・関心や能力、取り組み＝自

己アピール」「専門科目」「得意科目」「課外活動」「性格の長所」「趣味・特技」「大学生活を通して得たこと」の7つで、それぞれ100～200字程度の分量となる。学生には、「結論→根拠」という文章展開や「一文に3つ以上の内容を入れない」「できるだけ短い文を繋いで文章を組み立てる」ことを意識させると同時に、これまで培ってきた調査能力と添削能力を駆使して誤りのない文章を作成するよう指導した。また、短い文章のなかにも具体的なエピソードや体験を入れること、数字や固有名詞を入れることで論述の具体性を高めるための工夫をすることも要求した。

●後半の日程の評価について

評価は全体で25点分、各項目4点満点でそれぞれ表現3点、内容1点とした。文章展開や表現面で大きな問題のない文章については3点与え、論述の具体性などを通して内容的な充実が認められれば1点与えた。ただし、誤字や表現面での明らかなミスが認められた場合は上限を設けず1箇所につき1点減点した(25箇所ミスがあれば0点となる)。全体の平均は20点(8割)ほどとなった。

2.3 学生の反応について

以上が大まかな授業内容だが、学生の反応は概ね悪くない。授業のコメントで「新聞やニュースを気にするようになった」「ことばの意味を調べる癖がついた」「文章内容をまとめる力やスピードが上がった」と述べる学生も少なくない。自己紹介書の作成についても文章の点検を望む学生が非常に多かった。また、学期末のアンケートでは「毎回集中して取り組む必要があり、やりがいがあった」といったコメントを記す学生もいた。教員からの解説をもっと増やしてほしいという要望もあったが、全体としては演習重視の授業形式について不満を抱く学生は少なめである。ただし、課題量の多さについての不満や改善要求はそれなりに提出されている。処理量を多くして慣れていくよりも1つ1つの課題にじっくり取り組むことを優先させたいと考える学生も一定数いるようである。

2.4 課題と今後の展望

以上が日本語表現Ⅱの実践報告となる。最後に、課題と今後の展望について述べてまとめた。まず、課題量については学生に過度の負担がかからない仕組み作りを検討する必要がある。知

識学習と要旨・作文作成の授業を別々に行うことを考えても良いかもしれない。次に、やや発展的な内容の新たな試みとして検討できることを2つ挙げる。1つ目は、同じ内容を扱った複数の新聞記事を読み比べて相違点を整理した上で自身の意見をまとめる機会を設けることである。2つ目は、より専門書に近いレベルの論述の文章について要旨を作成してもらう機会を設けることである。授業で培った方法・能力がより高度な内容・論述を含む評論文などにも通用することを実感してもらえると良い。他にも、文章点検にグループワークを取り入れることも検討できそうだが、現状では、各自でしっかりと課題に向き合ってもらい、その上でフィードバック資料を通して他者からの刺激を受ける方がより多くの学生の意欲を引き出しやすいと感じている。以上で日本語表現Ⅱの実践報告を終える。

3 宮城学院女子大学「日本語演習」(1年生全学部対象)実践報告 (河内)

3.1 講義の目的と概要

宮城学院女子大学の日本語演習は、大学1年生を対象とした前期15回の講義となっている。授業の目的は「日本語能力の基礎を確認し、文章や談話などの具体的な理解や表現を通して、それを鍛え、目的達成のための能力の育成を図る」とされているが、半期15回の講義で「文章や談話」の「基礎」から「育成」にわたる目標を達成することは簡単ではない。そのため必然的に比重と力点をどこに置くかが問題となるが、これを決める参考として毎年学生にアンケートを実施している。そこに示された学生の傾向としては、書くことに対する苦手意識を表明するものと、実利的な日本語スキルを身につけたいと要望するものに大別されるように思われる。この結果を受けて、論理的な文章作成法(レポートや小論文など)と、実用的な文章表現法(手紙やメールなど)を中心とした授業を展開し、それと併せて、漢字や語彙など基礎的な日本語能力の確認のため補足的に適宜ドリルを課すこととした。

授業を運営する上で特に意識している点の一つは、アンケートにも示された学生の「書くことへの苦手意識」である。これから大学生活を始めるにあたって「書くこと」に対する不安を口にする学生が少なからずいる一近年はむしろ多数を

占めている状況の中で、どのような講義をすべきかは常に留意される問題であるだろう。この課題を踏まえて、講義では、得意も不得意もなく等し並みに書ける文章スキルを身につけてもらうことを目指し、できるだけ「システムティックに書くこと」を意識した内容を実施している。以下、文章作成法に関する具体的な教授内容を示す。

3.2 講義内容と評価方法について

●自己紹介文（講義2回・課題1回）

最初の文章作成の課題は自己紹介文である。まずは最も身近なテーマについて、「情報の抽出・整理」と「文章の作成」という作業に取り組ませる。その際、まずは「自己紹介文作成フォーム」という用紙を用いるが、それは「情報を抽出し整理すること」および「話題を展開させること」を意識させることを目的としている。フォームは各項目を「端的情報」と「具体的情報」という二つのレベルで構成されており（例えば、「出身地」の項目で、端的情報は「仙台」と記入し、具体的情報の欄には端的情報をより展開させた内容、

「宮城県に所在し、伊達政宗、牛タンや笹かまが有名」などと書く）、この記述を踏まえて自己紹介文を作成する。この作業を通じて、話題展開の方向性をイメージさせるとともに、文章作成の前提として「情報の抽出・整理」が必須であることを意識させる。

●図書館ウォークラリー（講義1回・課題1回）

レポートや各種の課題に取り組む前提として、図書館の利用を促すために、その活用スキルを学ぶ。情報演習室にて、宮城学院女子大学附属図書館のデータベース一覧を紹介し、具体的な利用方法について講義し、その上でデータベースを実際に用いた簡単な問題を出す。さらに、その応用として、「図書館ウォークラリー」と名付けた課題を出す。課題用紙は3パターンあり、それぞれが指定されたテーマに従って、新聞・雑誌記事の検索と、論文や文献の検索および大学図書館での探索を課せられることとなっている。この講義では、単純な情報検索・探索のスキルを学習させるだけでなく、レポートを始めとした各種文章の作成において「情報」をいかに扱うのが前提的な振る舞いとなることを念頭に置かせ、その上で主体的に情報を摂取し選別する姿勢を身に付けさせることを企図している。

●レポート（講義3回・課題1回）

レポートについては、大学一年生が対象であるため初歩的なルールから教えることになる。特に、レポートに対して苦手意識を持つ学生も多いため、その点に留意する意味でも、まずは形式や構成の重要性を説くことから始めている。形式・構成を前提として教え、一定の規範に則れば記述することが可能となることを教授することで、「どこから、どのように書けば良いのか」という根本的な戸惑いを払拭させる狙いがある。それを踏まえて、レポートを試作するための文献を配布し、課題に取り組んでもらっている。なおレポートの構成については、論理的な文章の組み立て方として、序論・本論・結論にわけた大枠に加えて、本論のプロットを「一般的概要／調査と考察／見解や意見」の3つの要素で説明し、それを反映した「レポート作成フォーム」という用紙に情報を抽出・整理させ、その上でレポートを作成させている。

なお、評価の基準は、①形式（タイトル・講義名や氏名の記入・参考文献など）が守られていること、②構成に従い論理性を確保した内容となっていること、③文献からの引用が一度はなされていること、④常体で統一され誤字脱字がないこと、⑤一定の記述量に達していることであり、形式的な部分に比重を置くため、内容の良し悪しについては基本的に問わない。

以上の他に、学生からの希望を受けて、就職活動を見越した小論文の作成について教授し、意見を裏付ける論拠の提示と、論理の一貫性が重要であることを踏まえさせ、テーマに従った課題に取り組ませた。また、手紙文の作成、メールの作法、敬語の活用など、大学生としてのみならず、社会的存在として意識されるべき日本語能力についても授業で扱っている。

3.3 学生の反応と今後の展望

学生からは、「レポートを書く戸惑いが解消された」や「調べ方や形式など、初歩的な内容がすべて安心した」といった意見があり、こちらの目論見に対して一定の反応があったと評価できる。また、「大学や社会で役に立つ日本語が学べた」という声も散見され、やはり実用性を重視する傾向が見受けられる。一方で、読解力や語彙力に関する内容が不十分であるという評価もなされた。

これらの反応を受けて今後の課題として引き

続き意識したいのは、学生の要望の両輪である「アカデミック」と「プラクティカル」な日本語能力の教育を、特に大学一年生を対象とした基礎学力の問題として、どのような方法およびバランスで実施していくかである。

4 小山工業高等専門学校「文学」(4 年生対象) 実践報告 (茂木)

4.1 講義の目的と概要

当該講義の目的として執筆者が設定しているものは三点ある。

第一点は、受講者が大正期から昭和初期の中編小説について歴史的な文脈と関わらせながら論ずることができるようになることである。当該講義では池内紀ほか編『日本文学 100 年の名作 第 1 巻 夢見る部屋』および『日本文学 100 年の名作 第 2 巻 幸福の持参者』(ともに新潮文庫、2014)を使用し、同書に収められている大正期から昭和初期の短編・中編小説に関して、そのテキストが生成された時代背景を思考に繰り込んだ読みができることを一つの到達点として考えている。

第二点は、受講者が文学的なテキスト分析の方法を知り、対象を多面的に考察できるようになることである。第一点に掲げた目的とも深くかわるものであるが、高等専門学校の 4 年生は四年制大学および短期大学の 1 年生の学齢に相当しており、3 年生までの関連科目である国語の授業では高等学校の国語と同様のものを履修しているため、特に近代の小説テキストの解釈と鑑賞に長けているとはいいがたく、その方法の獲得を特にテキスト細部への注目を促すことによって達成することを目指すものである。

第三点は、受講者がプレゼンテーションやレポートの形で自らの考えを論理的に表現することができるようになることである。当該授業では各個人によるテキストの読みを、プレゼンテーションのかたちで毎回担当者を設定し、論じてもらうこととし、また学期末にはそれに関するレポートの作成を要請している。既述のような歴史的な文脈の参照や細部への注目を行った際に、決して整合的ではない読みが生まれることも十分に予測されるが、それを論理的かつ説得的に表現できることを目指している。

なお、同校においては教育方針として、日本技術者教育認定機構による基準(JABEE 基準)と対応する以下の 6 項目が挙げられており、開講さ

れている講義の目的には以下のいずれかを設定することが求められている。

- ① 豊かな人間性の涵養
- ② 豊かな感性と創造力の育成
- ③ 自然科学・数学・英語・専門基礎科目の学力向上
- ④ 高度な専門知識と問題解決能力の育成
- ⑤ 情報技術力の向上
- ⑥ コミュニケーション能力と国際感覚の育成

当該講義の目的としては、既述の第一点が①に、第二点が②に、第三点が⑥に対応するとした。

4.2 講義内容と成績評価の方法

●授業内容に関して

当該講義のシラバスにおいては、以下の内容について計 30 回の授業を行うこととした。

1. イントロダクション／2. 荒畑寒村「父親」／3. 森鷗外「寒山拾得」／4. 佐藤春夫「指紋」／5. 谷崎潤一郎「小さな王国」／6. 宮路嘉六「ある職工の手記」／7. 芥川龍之介「妙な話」／8. 内田百閒「件」／9. 宇野浩二「夢見る部屋」／10. 稲垣足穂「黄漠奇聞」／11. 江戸川乱歩「二銭銅貨」／12. 中勘助「島守」／13. 映像と文学①／14. 映像と文学②／15. レポートの書き方について／16. 岡本綺堂「利根の渡」／17. 梶井基次郎「K の昇天」／18. 黒島伝治「渦巻ける鳥の群」／19. 島崎藤村「食堂」／20. 加能作次郎「幸福の持参者」／21. 夢野久作「瓶詰地獄」／22. 水上瀧太郎「遺産」／23. 龍胆寺雄「機関車に巣喰う」／24. 林芙美子「風琴と魚の町」／25. 尾崎翠「地下室アントンの一夜」／26. 上林暁「薔薇盗人」／27. 堀辰雄「麦藁帽子」／28. 映像と文学③／29. 映像と文学④／30. まとめ

授業日数及び受講人数の関係等から、実際にはイントロダクション、報告者の決定、大正期から昭和初期の歴史と文学についての解説で 3 回を要したため、13 回および 14 回に予定していた映像と文学の講義は後ろ倒しすることとし、また 15 回に予定していたレポートの書き方についてはレポート執筆に関する要綱を配布するにとどめ、実施しなかった。

なお、当該授業は4年生の機械系1学科と情報系2学科の計3学科を対象に行っており、それぞれの受講者数は40名（うち留学生1名）、40名、36名（うち留学生1名）となっている。

各回の授業内容としては、基本的に受講者2名1組（場合によっては1名）で、作家およびテキストについて、パワーポイントもしくはハンドアウトを用いたプレゼンテーションを行ってもらい、その報告に関する質疑応答を行った後、講師による発表への講評および受講者とのテキスト解釈をめぐるディスカッションを行っている。

プレゼンテーションに際して、発表者には作者について略歴を作成すること、あらすじを叙述すること、細部の表現に注目し、分析を行った後、論理的に、かつ受講者に伝わるようにプレゼンテーションすることを求め、その調査に際しては事典、評伝、論文等のほかに、Wikipediaなどの改変可能なWebページを除くインターネット上の情報を参照することを求めた。プレゼンテーションにおける論理性をめぐるのは、テキスト本文の積極的な引用と、その引用部の表現におけるニュアンスとコンテキストの分析をテキスト全体の読みに還元することを一つの方法として提示している。

一方で、プレゼンテーションを聞く聴講者に対しては、毎回アンケートを課して報告内容の評価と報告に際してのアドバイス等意見の吸い上げ、出席の確認を行っている。また、報告を聞くにあたって報告内容の事実確認等の疑問が出た場合には、携帯端末等の使用によってその場で調べることを推奨しており、それに基づいた質疑応答を期待している。

●成績評価に関して

成績評価として、シラバスでは発表40%、レポート50%、参加態度等10%で評価するとしている。

まず発表内容に関しては、毎回以下の項目を設けたアンケートを受講者に配布し、4段階（大変良くできていた／よくできていた／まあまあできていた／できていなかった）で評価を行わせ、講師による評価と併せるかたちで毎回の評価を行っている。

- ①作者についてよく調べられていたか。
- ②あらすじはよくまとまっていたか。
- ③オリジナルの解釈がなされていたか。

- ④報告資料等はわかりやすく作ってあったか。
- ⑤発表者の態度（声の大きさ等）は適切だったか。

次にレポートに関しては、前期のレポートとして報告担当者と報告を担当していない者に対してそれぞれ別個の課題を課した。

まず、前期の報告者に対しては、報告評価のアンケートを踏まえて、自らが行ったプレゼンテーションの問題点・反省点を挙げるとともに、改善のプランを示し、報告内容について議論とアンケートを受けてまとめなおして叙述したものの提出を求めた。評価の割合としては問題点・反省点の列挙と改善のプランで40%、議論とアンケートを踏まえてまとめなおした報告内容で60%とした。

また報告していない受講者については、前期で扱った小説のうち、興味をもったものについて、その小説についての論文などの参考文献を最低1点以上読み、参考文献や報告者の報告内容とは異なる独自の解釈を提示することを求めた。評価の割合としては先行論が引用され、適切に読めているかどうかで40%、解釈を叙述できているかどうかで60%とした。

最後に参加態度としては、アンケートにアドバイスや感想、意見等を述べているか、また質疑応答の際に積極的に発言をしているかどうかを参考に加点を行っている。

4.3 学生の反応と今後の可能性

当該授業に臨む学生の反応としては、一度報告を経験した学生の態度の変化を挙げることができる。

受講の際には最低1回はテキストを通読することを要請しているが、扱うテキストが大正期から昭和初期の小説という、現在の学生には読み慣れていない文字テキストであるため、一部の学生を除いてこれは容易に達成されない状況にある。

しかし一度報告を経験した受講者は、その後の授業でテキストをあらかじめ読んで参加する傾向が確認され、質疑応答の際にも特に発言する回数が増加している。小説テキストを「論じる」という経験によって、担当したものとは違う小説テキストであってもその議論に参加するモチベーションが向上していると言えるのである。ここからは、プレゼンテーションを以て授業の終着点とすることのない、日本語表現をめぐる講義の可能

性の一端が看取されるだろう。

おわりに (高橋)

以上で実践報告を終える。最後に、報告内容をまとめた上で、今後の展望、可能性について簡単に述べる。

まずは「講義の目的と概要」と「成績評価の方法」についてまとめる。4つの講義は、その目的として表現力を身に付けさせることを挙げている点で共通している。何を題材とするかで違いはあるものの、いずれも、大学・高専や社会で通用する表現力を身に付けさせようとしているのである。また、いずれの講義でも、書いて／発表して終わりとするのではなく、成績評価方法の明示や講義中の指示を通じて、講義中のみならず、講義前後・外において、個々の学生が主体的によりよい表現を探し、つくり出していけるような指導をしている点でも共通している。

続いて「講義内容」について見ていくと、1章で報告された「日本語表現」と3章の「日本語演習」は、どちらかと言えばアウトプットの方法を指導することに重点が置かれているのに対し、2章の「日本語表現Ⅱ」と4章の「文学」は、インプットとアウトプット両方の力を学生に身に付けさせようとしている点に違いが見て取れる。大学生・高専生4年生にふさわしい読解力を身に付けさせることと、レポート作成や就職活動を意識して表現の型を身に付けさせること、どちらを重視すれば良いのかは、時間の制限もあるため悩ましいところである。(2章・3章)。

東北工業大学に話を限定すると、半期 15 回の講義が通年 30 回に拡大されたときに、このインプットとアウトプットのバランスをどうするか、あるいはアカデミックな日本語(読解・表現)力と実用的な表現力(2章)どちらに重点を置くかについての検討が必要になるはずである。2章で紹介された読解力+表現力の指導、3章で紹介された「図書館ウォークラリー」、4章で報告されたプレゼン指導などの実践内容とともに、工大での今後の日本語表現講義の中身を検討する際に参考となる貴重な報告であった。

さて、いずれの報告者も、学生の声や授業内外の手応え、個々人の考えをもとに、講義をつくっている。大きな講義目的をふまえながら、より細かい目的も設定し、目的にかなう力を付けさせる

ために、授業内容や課題をかなり綿密に設定している。日本語表現、具体的には文章を書くことや発表が苦手と言った学生でも、教員がはっきりと目的を提示すること、そしてその目的を果たすための課題を設定することで、講義には積極的に参加できている。

こうした、学生を目の前にしての実践に於ける具体的な工夫のなかにこそ、日本語表現系講義を充実させる道が確かに存在し、あるいはその可能性も生まれてくるはずである。